



さかいぎ

チャレンジアップ! かがやく自分

9月号

令和6年 8月27日

横浜市立境木小学校

校長 阿山 美香

「関わり」が育む「思いやりの心」

児童支援専任 荒川新之輔

子どもたちのにぎやかな歓声が学校に戻ってきました。例年より遅れての梅雨入りで「雨」の日が比較的少なかったせいでしょうか、「暑さ」が例年にも増して厳しく感じられた「夏」でもありました。

児童支援専任として子どもたちの様子を見ていますと、子どもたちどうしが、お互いの関わりの中で成長し合っている様子が見られる場面が多々あります。一方だけでなく「お互いに」成長し合っているのです。

7月半ばまで、6年生が1年生の給食の後半から清掃にかけて入っていました。1年生にとっては不慣れな「牛乳パックを開く作業」を見守りながら、「ここぞ」という際に6年生が支えています。その絶妙さには、ただただ感心させられます。食器の片付けの際には、1年生が落とした箸をさりげなく拾い、残った食べ物を、これもまたさりげなく、しゃもじやスプーンできれいにしてくれています。1年生をよく見ているからこそその「思いやり」だと感じた次第です。また、清掃時には1年生の小さな机を、1年生の身長に合わせ、自身の身をかがめながら一緒に運んでいます。机の両脇を身長差のある二人が運ぶ様子は、「ずっと映像で保存しておきたいな」と感じさせるような微笑ましい場面でした。また、その中で1年生が6年生との関わりを通して成長していっている様子も確実に感じます。

そういえば昨年度も当時の6年生が「新体力測定」の際に、ペアで組んでいた1年生を優しく支援していました。とりわけ、ある男子の行動は見ていてその姿があまりにも素晴らしかったので、当時の担任に聞いたところ「そうなんです。わたしも感じていました。1年生のことを本当によく考えてくれているんです。」と答えていました。さすが担任、よく見ているな、とも感じましたし、その男子の「成長」を感じている担任の「嬉しそうな笑顔」も印象的なできごとでした。

わたしは、熊本市の小学校に入学しました。もう50年以上も前のことです。おぼろげな記憶の中で、印象に残っていることがあります。それは「6年生の大きさ」でした。「大きさ」というよりも、「頼もしさ」であったのかもしれません。入学したばかりの少年が、そのときに見上げた6年生の大きかった背中を50年以上たった今でも鮮やかに思い起こすことができます。

たとえ月日が何年経とうとも「変わらないもの」は確実にあるようです。令和6年度の1年生が6年生に感じている「思い」は、50年以上前に感じたわたし自身の「思い」と共通しているように思うのです。また、「相互に関わり合う」なかで育まれた「思いやり」の心情は、きっと小学校卒業後もそれぞれの「心の奥深く」に確実に残っていくもののような気がします。子どもたちが「素直な心」で感じているであろう様々なことは、「よりよく成長していこう」という子ども自身の「本能」のような気もします。

児童支援専任として、「子どもどうし」の関わりの中から感じていたことを書いてみました。これからも本校の子どもたちがお互いの関わりの中で成長していく場が増えていくよう支援を重ねてまいります。保護者の皆様、夏休み後も変わらないご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

『幼いということは、それ自身ひとつの正しさをもつ。』

成長しようとする本能は純粹だから、選択も迷いがなく、確かであるかもしれない。』

～山本周五郎著『菊屋敷』より～